

# 【資料紹介】長崎市小江遺跡出土の土師器

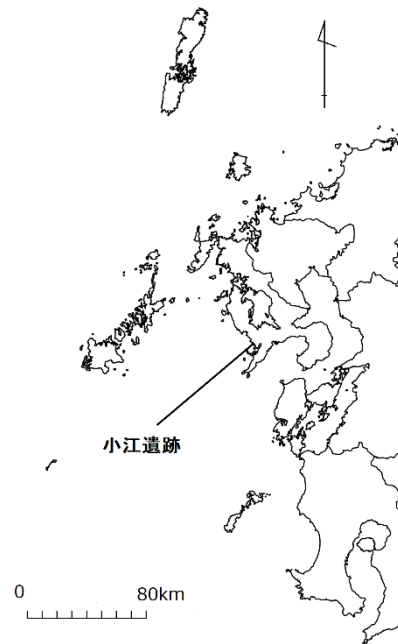
古門 雅高

## はじめに

長崎市文化観光部文化財課の田中 学氏より、2006（平成 18）年の下水道管敷設工事に伴う長崎市小江（こえ）遺跡の範囲確認調査の際に土器が出土したという情報をいただいた。

早速許可を得て実見したところ、土器の出土量はコンテナ1箱ほどで、ほとんどが洞部片であった。土器の型式は布留式土器で、その中に数点の肥前型器台、脚台付甕形土器（以下「台付甕」と呼ぶ）、椀形土器の破片を確認した。

同土器は範囲確認調査による出土のため公開の義務はないが、資料の重要性や稀少性を考慮し、長崎市文化観光部のご高配を得て本稿で紹介・公表することにした。



第1図 小江遺跡の位置

## 1 小江遺跡の地理的環境

小江遺跡は長崎市西部の小江町にある遺跡で、長崎県遺跡地図には縄文時代と弥生時代の遺物包含地と記載されている。遺跡は角力灘に面し、南西に開く湾に小江川の沖積作用と海からの堆積作用によって形成された狭小な平野があり、その上に立地する。今回の調査地は遺跡中心部より南側にあり、遺跡範囲の周辺部にあたる（第4図）。



第2図 小江遺跡の位置②（グーグルアースより）

## 1 出土の経緯

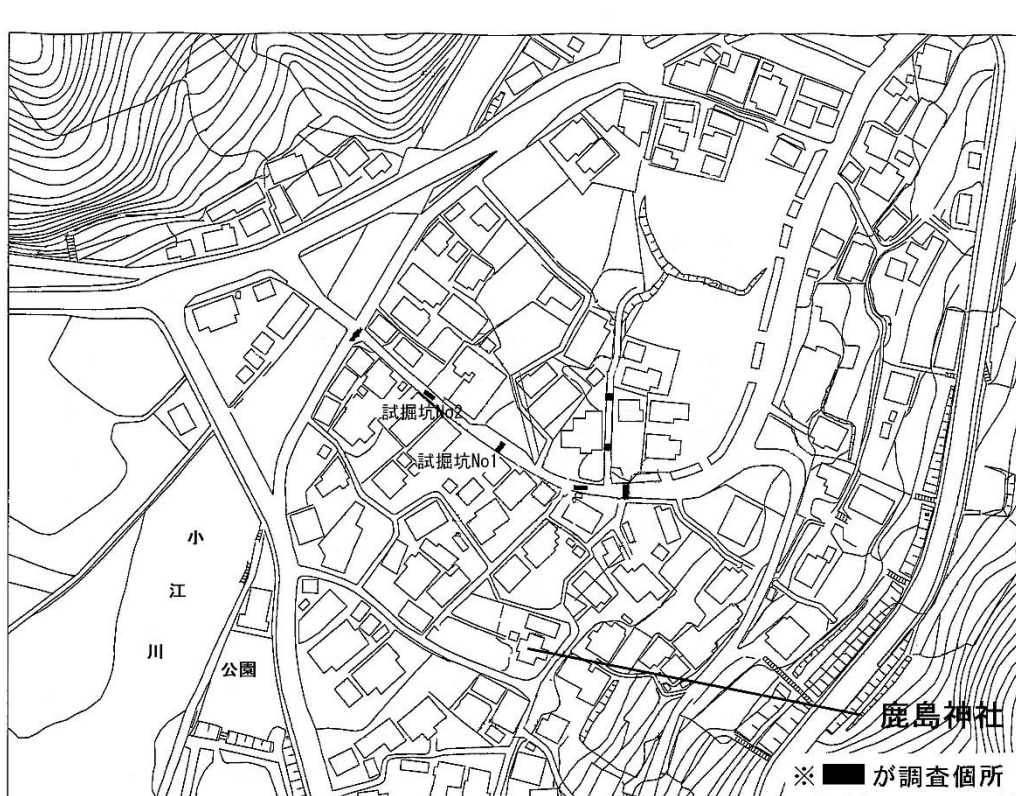
市役所に残る当時の記録によれば範囲確認調査は2006（平成18）年8月23日から同年9月6日まで長崎市文化財課により実施された。工事対象地に7か所の試掘坑を設定し、うち2か所（試掘坑No1, No2）で遺物包含層を確認している（第3図）。土師器以外は近世陶磁器が出土しているのみで、土器1、2型式ほどのわずかな期間に遺跡が形成されたと考えられる。以下は当時の記録による各試掘坑の状況である。なお遺物が出土していない試掘坑の説明は割愛する。

### (1) 試掘坑No1

「試掘坑の大きさは2.2×1.0m。明黄褐色の造成土の下に黒褐色シルト混細砂が確認できた。」  
近世陶磁器と古式土師器はこの土層から出土している。「分層はでき」なかったという。

### (2) 試掘坑No2

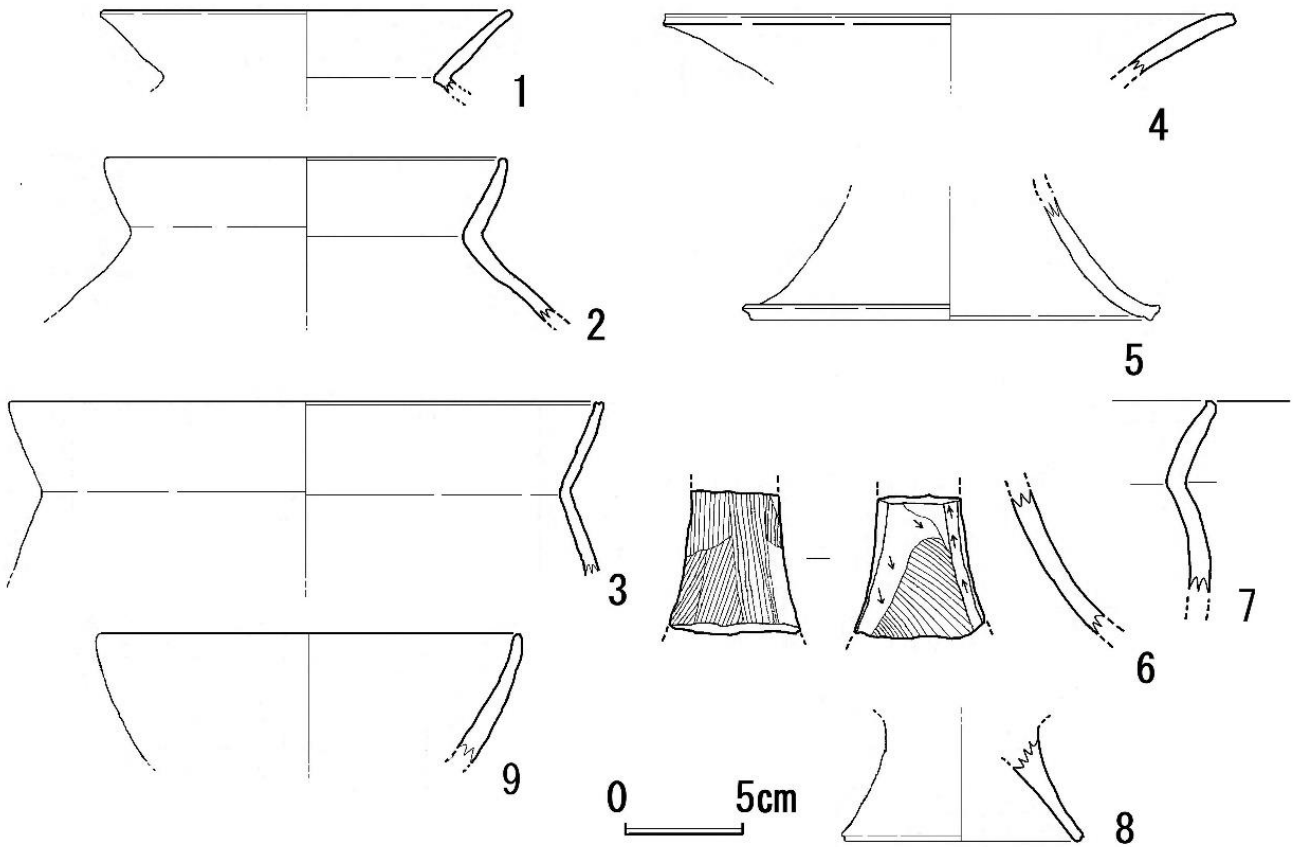
「試掘坑の大きさは3.0×1.0m。明黄褐色の造成土の下に、円磨礫を主体とした層があり、その下に江戸時代の陶磁器を僅かに含む黒褐色シルト混細砂が確認できた。その下層は暗黄褐色の砂層であり、旧海浜と考える。」



第3図 小江遺跡の地形および調査区 (S=1/2,500 長崎市文化財課提供 一部加筆)



第4図 小江遺跡の範囲 中央部網掛け部分 (web版長崎県遺跡地図一部改変) S=1/5,000



第5図 長崎市小江遺跡出土土器 (S=1/3) 筆者実測・トレース

### 3 出土土器の概要 (第5図)

小江遺跡から出土した土器を第5図に示した。7は試掘坑No1から出土し、8は試掘坑No2から出土した。3は出土地不明。その他の土器は試掘坑No1からの出土である。その他の土器は7と同じ試掘坑出土ながら、距離を置いて出土している。

1～3は甕形土器の口縁部片である

1、2は布留式土器の影響を受けた甕形土器の口縁部片である。1の復元口径は約17.6センチ、2のそれは約17.2センチで、1は2より口縁部の外傾度が強く古い形態を遺している。両者の内外の器面調整はナデ消しされている。これらの甕形土器には典型的な布留式の甕形土器の特徴が見られない。例えば波打ちながら立ち上がる口縁部や、口唇部の内側への肥厚さらには口唇部先端を摘み上げる成形などである。共伴した胴部片を観察したが型式的に古相を示すとされる波状沈線文などもない。頸部の外反度も弱く、胎土は台付甕と同様の胎土で、精選されている印象は受けない。全体的に成形が雑な印象を受ける。3は布留式土器の影響を受けた台付甕である。復元口径は約25.4センチである。

4、5は肥前型器台で口縁部(4)、脚裾部(5)、透かしの杵部(6)がある。裾部先端には同器台の終末期に特徴的な跳ね上がるような成形を施している。4の復元径は約24センチ、5の復元径は約18センチである。両者が同一個体であるかどうかは判断できなかった。内外面は黄橙色で胎土は精選されている。同器台は本県本土部西岸ではこれまでに長崎(野母)半島西岸の深堀遺跡で確認されているのみで、西彼半島西岸域では初めての発見であった。

7は台付甕の口縁部片で、9は脚部片である。両者の色調は黒褐色で、7の表面には煤が付着している。

9は碗形土器である。復元口径約18センチを測る。

以上の土師器は、近世陶磁器以外の遺物が共伴しないところから、古墳時代前期末の遺構ないし包含層が近世になって破壊・攪乱されたことによって遺ったものと推定した(註1)。

### 4 小江遺跡出土の土器の歴史的評価

#### (1) 布留式の甕形土器について

出土した甕形土器には前述したように典型的な布留式土器の甕の特徴が見られない。さらに布留式の甕形土器に後続する口縁部が直口縁で、外方に長く直線的に開く型式や、さらにその後続型式である外へ湾曲しながら開く口縁部の甕形土器も見あたらない。総じて典型的な布留式土器の直後型式との印象を受けた。他地域の編年では蒲原編年の土師本村3式古段階に併行する土師器と判断した(蒲原2019)。本県本土部では伝黄金山古墳出土土器が該当しよう。

布留式土器を出土した近隣の遺跡として佐世保市の古田(ふるた)遺跡がある(小佐々町教委編1985)。小江遺跡の土師器同様に蒲原編年の土師本村3式土器併行と思われるが、筆者は同式の中でも新段階の資料と考えている。蒲原によると土師本村3式古段階の実年代は4世紀末、同新段階は5世紀初頭であるという(蒲原2017、同2019)。

本県本土部西岸に新相の布留式土器を出土する遺跡が点々と分布することは宇野慎敏が既に指摘しており(宇野2013)、4世紀後半以降「有明海から島原湾沿岸部の中九州や肥後の有力首長層が長崎半島の南を經由し、東シナ海を北上して壱岐水道に至る航路の安全性は、古田遺跡や宮田石棺群、深堀遺跡の住人たちの先導によって確保されていたのではないかと推測されるのである」と述べている(宇野前掲P.5)。背景には当時の倭王権の朝鮮半島への軍事進出がある。今回の小江遺跡での布留式土器の発見により、宇野の学説をさらに補強する物証が得られたことになる。



写真1 小江遺跡出土土器

(2) 肥前型器台の下限

小江遺跡出土土器の中で特筆すべきは布留式の甕形土器に肥前型器台が伴うことである。1、2、4、5、8は同一試掘坑の同じ場所から出土しているため、共伴する可能性が高い。これまで大村、島原地域の竪穴建物跡からの出土状況から同器台の下限は布留1式土器併行期までで、典型的な布留式土器とされる布留2式土器併行期以降は消滅すると考えられている(宮崎 2022)。即ち布留式土器の象徴である小型丸底鉢や小型器台に駆逐されたとの理解である。しかし小江遺跡で肥前型器

台に布留式の甕形土器が確実に伴うのであれば、筆者が「スカ」と呼ぶ当地では同器台が布留2式土器併行期以降も残ったことになり、今後検討すべき課題である。ただしソノキ（旧彼杵郡域）・タカク（旧高来郡域）の肥前型器台が布留2式土器併行期段階で消滅することは、これまでの大村市竹松遺跡の発掘調査の成果などからほぼ確実であるので、筆者は肥前型器台の残存は当地の地域性と考えざるを得ないと判断している（註2）（註3）。

本稿を執筆するにあたっては長崎市文化観光部文化財課の宮下雅史氏と田中 学氏に大変お世話になった。末筆ながら芳名を記し感謝申し上げたい。

（令和4年10月18日脱稿）

### 【註】

- 註1** 当該土器の出土状況について宮崎貴夫氏と議論したが、氏は本稿で取り上げた土師器群は出土状況や近世陶磁器を伴うことから、その一括性や同時性に疑念を示された。筆者は近世以外に他の時代の土器を含まないこと、他の試掘坑から遺物が出土しないことからこの土師器群の一括性は、かろうじて担保されていると判断し、本稿を執筆した。今後の調査成果の蓄積を待たなければならないが、宮崎氏との見解の違いを公にし、将来に向けての課題としたい。
- 註2** 筆者は西彼半島・長崎（野母）半島の西岸部を「スカ」と呼称しているが、この地域は5世紀中頃までは無古墳地帯であった。言い方を変えれば古墳祭祀を受容しなかった地域であるわけで、布留式土器の小型丸底鉢（壺）や小型器台が古墳祭祀の祭器であるとすれば、当然これらの形式の土器は受け入れなかったはずである。そうなると肥前型器台が残ることも必然であったと言えるかも知れない。
- 註3** 第5図の3、7、8の台付甕は布留式の甕形土器と出土地点が異なるため、布留式の甕形土器と共存するかどうか不確かである。したがって本稿では台付甕の下限については検討することができなかった。しかしながら筆者は台付甕が布留2式土器併行期まで残るが布留3式併行期以降は消滅すると考えているので（古門2022）、仮に小江遺跡の布留式甕との共存が確実であれば、肥前型器台と同じく当地においては布留3式土器併行期まで台付甕が残る可能性を検討しなくてはならない。今後の課題である。

### 【引用・参考文献】

- 宇野慎敏 2013 「九州島における4・5世紀の様相（2）－肥前（2）－」『つどい』305号 豊中歴史同好会
- 蒲原宏行 2017 「九州島における古式土師器－佐賀・唐津平野」『第19回九州前方後円墳研究会 長崎大会 発表要旨・基本資料集』九州前方後円墳研究会
- 蒲原宏行 2019 「古墳時代初頭前後の土器様相－佐賀・唐津平野の場合－」『弥生・古墳時代論叢』六一書房
- 小佐々町教委編 1985 『古田遺跡』小佐々町文化財調査報告書第1集 小佐々町教育委員会
- 古門雅高 2022 「前方後円墳分布周縁地域の社会－長崎県本土部の古墳時代前期および中期を中心に－」『西海考古』第12号 西海考古同人会
- 宮崎貴夫 2022 「「肥前型器台」の再検討－地域性と型式変遷について－」『長崎県埋蔵文化財センター研究紀要』第12号 長崎県埋蔵文化財センター